

第4回 第四次長野市子ども読書活動推進計画策定委員会 会議要旨

- 【日 時】 令和4年10月13日（木） 午後2時～午後3時40分
【場 所】 長野市立中部公民館 4階ホール
【出席者】 委 員 伊藤直子委員 岡田まみ委員 小林洋子委員 西澤久美子委員
林明美委員 渡邊望委員
事務局 藤澤教育次長 勝野教育次長 長野図書館長 南部図書館長
健康課長補佐 こども政策課長 保育・幼稚園課長補佐
教育委員会総務課長 学校教育課長
(家庭・地域学びの課) 野池課長 前田補佐 古平係長 西村主事

- 【会議内容】 1 開会
2 委員長あいさつ
3 協議事項
(1) 第四次計画（案）について
(2) 中間答申について
(3) その他
4 閉会

<次第>

3 協議事項（1）について

委員：資料2 26 ページ 2 おとなの読書活動の推進について、今回「おとな」という視点を入れ、それがこれからどのように市民の中に受け入れられていくのかを考えたときに、大事な文言を入れていただいたと思う。大人は、本当に厳しい時間の流れの中で生活していると思うが、それを踏まえてでも、こういった方法・方向でやっていければと思った。

資料2 20 ページと 28 ページの「司書教諭や学校司書による読み聞かせや、パネルシアター等を行い」という文言について、「司書教諭や」という部分が若干引っかけ。司書教諭は、小学校では担任を持っている。司書教諭は自分のクラスに読み聞かせをするということは可能だが、「司書教諭や学校司書による読み聞かせ」となると、司書教諭にとっては少し負担過多かなと思う。「司書教諭と学校司書の連携による」というように、（司書教諭と学校司書が）相談して行うような文言に変えていただいた方が、実際に司書教諭が読んだ時には負担感が減るのではないかと思う。

委員： 司書教諭は12学級以上の学校に配置することになっており、全学校には配置されていない。また、(学校では) ボランティアが入って読み聞かせをしている現状もあるので、文言をどうするか悩むところではあるが、司書教諭が浮き彫りになっていくのは私も少し不安がある。

委員長： この部分について文言を検討していきたい。学校教育課としてご意見はあるか。

事務局： ただ今のご指摘を受けて、その通りだなということを感じた。委員さんのご意見の通り、司書教諭は12学級以上の学校に配置されており、司書教諭自体が独立したのではなく担任を兼ねているので、この先生が全校の読み聞かせをすることは難しいと思う。学校の現状として、学校司書が読み聞かせをしたり、地域のボランティアが読み聞かせをしているので、限定した文言は誤解を招いてしまうのではないかと思う。

委員長： 関係課と委員長、副委員長で文言を検討したいと思うが、よろしいか。

一同： 同意。

委員長： ありがとうございます。その他にご意見はあるか。

委員長： 初めにも申し上げたが、実際に実施できる計画を作りたいと思っており、計画は冊子ができて完結ではなくその先実施していくことが重要だと思う。今後、関わる課の皆さんが、この第四次計画でどこか窮屈になったり、負担が偏ったり、他の業務に支障が出たりすることは無いか確認をさせていただきたい。

また、資料2-2数値目標の「児童書の貸出冊数」と「おはなし会参加者数」について、(計画の最終年度である)令和9年度は、児童書に関わる小学校1年生から中学3年生ぐらいの子どもの数はコロナ禍前に比べて随分減るのではないかと思う。そのため、目標値をコロナ禍前の数字に合わせるということは、コロナ禍前より多くの参加率が必要になると思うが、そこを目標数値としていいのかどうかを、ご確認いただきたい。

事務局： 第四次計画の具体的な取り組みについては、関係課が事前確認をしている。計画へ記載したものについては、取り組んでいくことができるものとしてお考えいただきたい。

事務局： 子どもの数が減るということを見込んで数値目標を設定している。資料2-2の上から3つ目「図書館分室における児童書の貸出冊数」についても、子どもが減っていく見込みの中で計上している。要は、1人当たりの貸し出し冊数は増加するという見込みで数値を設定しているということである。

委員長： ありがとうございます。下から2番目の「市立図書館における児童書の貸出冊数」も同様である。パーセント(表示)だと良いのだが、数で新型コロナウイルス感染症拡大以前の水準までの引き上げとした場合、子どもの数を考えると(達成が)難しいのかなと思う。

事務局： 確かに子どもの数は減っていくと思うが、魅力ある図書館づくりをして、令和元

年度のコロナ禍前の数値をキープしたい、それを目標にやっていきたいと考えている。

委員長： ご意見ありがとうございます。目標値についても、事務局からお示しいただいた通りでよろしいか。他にご意見はあるか。

委員： 私は今の説明が一番腑に落ちた。義務（教育）の現場でも、市立・県立図書館でも、図書館の利用率がどうなのかと考えたときに、決して令和元年度の時点でも児童数と比べた時に貸し出される本の冊数がまだ多いとは判断されてないのではないかと思っている。そのため、この（市立図書館における児童書の貸出し冊数の）約1万冊（の増）は、児童数が減少する中で、より魅力的な取り組みをしていくことを踏まえて設定したということではよろしいかと思う。

ただ、魅力ある図書館づくりを考えていくにあたっては、図書費等の予算化が一つ目に見える数字になってくると思う。具体的に、市立公民館にある図書館分室の本は古くボロボロのものが多かった。今後、予算とこの第四次計画が相まって動いていくことを期待したい。

委員長： 子どもは減っていくが1人当たりの貸出し冊数が増えている、ということの説明も、どこかにあると良いかと思うがいかがか。せつかなので、魅力ある図書館を作り、（貸出し冊数を）増やしていくということに触れることができれば良いと思う。そこをご検討いただきたい。

委員長： 資料2-2以外のところでも、ご意見ご質問等あればお願いしたい。

委員： 今、特別な支援を必要とする子どもは多い。自閉スペクトラム症や、多動で落ち着きがなく騒いでしまう子どもについては、図書館は静かにしなければならない場所だからという理由で、保護者が連れて行きにくい場合もあるのではないかと思う。電子図書の普及により好きな本を家庭で選ぶことができれば、（読書）環境が豊かになるのではないかと思うが、やはり図書館にも足を運んでもらいたい。

実際には、特別な支援を必要とするお子さんがクールダウンする場所として図書館を利用することはあるか。また、そういったお子さんたちが分かりやすいように、図書館に「声のボリュームはこれくらいにしましょう」と表示をしたり、親子で本を読めるように空間を区切って落ち着くことができる場所を作るといった取組は行っているか、また、可能か。

委員： 図書館が心の拠り所となったり、気持ちを整える場所となっているお子さんもいる。私が知っている事例では、学校図書館の環境に加えて学校司書という人の存在によって、子どもの気持ちが落ち着き、そこで子どもと本の出会いがある、ということがあった。今のお話を聞いて、親子で出会いたい本と出会いたい人がいる環境が望ましいと思った。

委員： 今、大人の言葉が乏しく、おいしいもまずいも、いいも悪いも全てが「やばい」で済んでいるといったような状況がある。資料2 1ページにも「子どもは読書

を通じて言葉を覚え、考えることや表現することを学び、自ら進んで知ることの楽しさを体験します」と記載があるが、家庭で本を読み、感想を言い合うことができれば、自分の気持ちを表現する言葉も豊かになってくるのではないかと思った。

委員： 第四次計画が策定され、運用していく時のことをお聞きしたい。子ども広場の現場では、子どもたちの読書を推進するために読み聞かせ等を一生懸命やっているが、現場はこの計画があるということを自分たちで知り、自分たちで見て、何をすべきかを考えるものなのか。第三次計画ができたときには、市からこの計画にのっとなってこういう活動してくださいという通知はなかったと思う。計画において重要とされているものを自分たちで読み解いてやらなければならないことについては疑問に思う。今回、新たに「おとな」という視点が入ってきている。計画が決まってから、色々な計画を立てて、目標に向かうよう推進されていくのだろうと思うが、具体的にはどのように進めていかれるのか。現場に対して、こういう計画があることもお知らせいただけるとありがたい。

委員長： ありがとうございます。第三次計画のときにはどのような形だったのかご存知であれば教えていただけるか。

事務局： 計画ができたのでこれにのっとなってやってください、という言い方はおそらくこれからはしないと思う。この計画を元にしてとは書いてはいないけれども、計画内の具体的取組を進める中で、市立図書館ではこんなことをやっていきます、保育園ではこういうことをやっていただければありがたい、NPOさんにはこういうことを手伝っていただければありがたい、という案内をしていくという考え方である。また、これから一番考えていかなければならないのが、第四次計画において新たに追加した「おとな」の部分や、書店との取り組みである。「おとな」という部分については、色々な所ですでに取り組んでいただいているが、そこに重点がかかったということをしてPRしていかなければならないと思うし、書店との取組をどのような形で進めていけるかについては、これからの検討していくこととなる。また委員の皆さんにも協力をお願いをするかもしれないが、よろしくお願ひしたい。

委員長： ありがとうございます。図書館の取り組みや学校の取り組みはここから直で下ろすことができると思うが、その他の所にどう下ろしていったら、実現させていくかということは、大変大きな課題だと思う。そのあたりについてもこの策定委員会の中でご意見を賜りながら、多くの人を巻き込んで、これを実践できるような取組ができたと思う。また、ご協力よろしくお願ひします。他にご意見はあるか。

委員： 漠然と思っていたのだが、この計画に書かれていることも、今まで実施されてきた内容も、「おとな」というのがお母さんとしか思えない。どうしてお父さんではないのかということやをずっと思っており、資料2-3のイラストもどう見ても母親と子どもである。このイラストを家族にした方が良いのではないか。また、資

料2 26 ページの「2 おとなの読書活動推進」のところで、「読書をしたくても仕事や家事が忙しく」と書かれていて、共感したが、仕事や家事（からイメージするの）はお父さんではなくお母さんである。お母さんが忙しい時はお父さんが担ってくれれば良いのだが、そのことについても何も書かれていない。これから更にお母さんだけが担うのは難しくなると思う。お父さんをどう取り込むかについてもう少し考えた方が良いのではないかと思った。

委員長： ありがとうございます。おそらく、お母さんに限定したくないがために「おとな」という言葉を使ってきたのだと思うが、節々にお母さんを匂わせる文言となっているということであるかと思う。

委員： 今のご意見は大事で、これを読んだときにそのようなイメージをする人もいるということを知っておかなければいけないと思う。私は、「読書したくても仕事や家事で忙しく」はお父さんとお母さんと読んだが、そうではない方もいる。母親に押し付けているように聞こえる文言になると、今のご指摘を受け入れて文言を選定しなおさなければならないのかなと思う。表紙のイラストに関しては、家族の（イラスト）方が良いのかなと思う。

委員： 家族にすると、シングルの方もいる（ので家族ではない方がよい）。ジェンダーや家族に関しては留意する必要がある。

事務局： 資料2 26 ページの文言について、「仕事や家事が忙しい」を削除して「読書をしたくても、読書に親しむ時間がとれないおとな」と誤解を招かない表現としてはどうか。

委員長： ありがとうございます。内容的にはそれで良いと思うが、「仕事や家事が」という言葉が入ることで忙しさを強調しているところもある。難しいところではあるが、どうしてもまだ日本の社会では家事は女性というイメージがあるため、「仕事や家事が忙しく、読書に親しむ」を削除し、「読書をしたくても時間が取れないおとなに読書に親しむきっかけや環境を提供していく」とするということがよろしいか。

一同： 同意。

委員長： ありがとうございます。他にご意見はあるか。

委員： 資料2 13 ページに、保健センター等の取組、妊婦からの啓発・読み聞かせの実施という記載がある。市ではおひぎで絵本事業で子どもが生まれてから、絵本をプレゼントしているが、妊娠期から保健センターなどで読み聞かせを聞く機会はあるか。よくクラシック音楽を聞かせると胎教に良いというが、妊婦さんが保健センターに集まって勉強をした時などに本の読み聞かせをするのも良いのではないかと思った。

事務局： 現在、保健センターでは、妊婦さんに対する読み聞かせは実施していない。胎教はとても大切だが、方法は人によって様々で、音楽を聞いたり、家族と会話をした

りしていると思う。妊婦さんに限定して読み聞かせを推奨しているということではないが、妊娠届出をされて母子手帳には、読み聞かせを推奨する内容が書かれている。また、新たに家庭・地域学びの課と共同で読み聞かせを推奨するチラシを、妊婦さんにお渡ししたいと考えている。

委員：（子どもが）生まれたら読むのではなく、生まれる前から家庭で子どもと共に絵本を読むことで、生まれてからスムーズに絵本の読み聞かせに移行できるのではないかと思った。お腹の赤ちゃんへの働きかけというよりは、保護者に対する働きかけというイメージである。「おとな」という視点で考えたときには、このようなことも大事になってくると思うので、今後このような活動が可能であるならば、考えていていただきたい。

事務局：委員の皆さんへチラシを送付させていただいたが、11月4日にじゃん・けん・ぼんにて「親子で楽しむ絵本講座」を実施予定である。講座の対象には、0～3歳の未就園のお子さんと保護者のほか、絵本を通したお子さんとコミュニケーションの楽しみ方を知って欲しいという思いで妊婦さんを対象に含めた。今回、残念ながら妊婦さんからのお申込みはなく、定員が一杯になってしまったが、今後もそういったイベント等を企画していけたらと思う。

委員長：ありがとうございます。計画内で文字にはしないけれども、そういったことの実施を考えていくということでもよろしいか。

委員：資料2 26ページの具体的な取組「学校図書館における親子向けイベントの企画・実施」について、何かできることはないかといくつかアイディアは浮かぶのだが、今の社会情勢として家族の多様化があり、“親”と名付けられない方に育てていただいているお子さんも実際にいる。そのようなところでイベントを実施する時のリスク等が色々頭の中を駆け巡り、イベントの企画・実施は苦しいなと思うところがある。学校の現状とすると、読書週間・読書旬間を実施している学校が90%以上であり、家庭読書というところでおとなへの働きかけをしているのが現状かなと思う。

委員長：ご意見ありがとうございます。実際にはどうか、事務局からお話を伺ってもよろしいか。

事務局：この項目は、資料1 NO.9のご意見を受けて追加したものであり、提案の中でも、親子の関わりを促進させるために図書館を活用したらどうかといったご意見であったかと思う。資料1にも回答を書かせていただいたが、コロナ禍前は学校参観日に保護者に図書館公開している学校や、そこで親子読書を実施する学校もあった。それをどこまで発展させるかは、学校によって違ってくると思うが、そのイメージでこの項目は作られている。イベントという言葉は大きな表現であったかと感じるが、イメージとすれば学校参観日や色々な行事の中で、こういった取組も取り入れていただきたいと考えている。

委員： 学校図書館に保護者を迎え入れるということはやはり責任が生じるし、時間の問題等もあるので、イベントという表現を少し変えていただけたらと思う。

委員長： 確かに、イベントという表現だと大きな（ことをしなければならぬという）イメージがある。学校図書館に親子で参加できる活動の企画・実施といった表現がよいか。

事務局： 委員のご意見にあったとおり、親がいない子どももいるので、親子という言葉は使わず、保護者という表現にした方が良く考える。

事務局： 表現については後ほど事務局で相談させていただく。

委員長： ありがとうございます。その他にご意見はあるか。

委員： 計画内に記載されている親子という文言については、もう一度確認をしていただき、保護者という文言に直すことができる部分については修正した方が良く考える。

委員長： ありがとうございます。おっしゃるとおりかと思う。

委員長： 表紙のイラストについてはどうするか。男性にも女性にも見えるものを作っていただけると良い。

委員： （BOOK ロウの）まつげを無くせば良いのではないか。

事務局： こちらのBOOK ロウは、公募で選ばれたキャラクターである。元のキャラクターにまつげがついていたため、まつげをつけたところ女性っぽくなってしまったかもしれない。このイラストはパブリックコメントで出すものではないので、修正をさせていただく。策定委員会はもう一度あるので、その時にまたご意見をいただきたい。

委員長： ありがとうございます。協議事項1については以上とする。

3 協議事項（2）について

委員長： ただ今、事務局から中間答申について説明があった。本日いただいた意見を踏まえ、委員長、副委員長、事務局で計画案として整え、中間答申として教育長へ報告する形で進めていきたいと考えているが、この流れでよろしいか。

一同： 同意。

委員長： 計画案について、微調整した部分は委員さん方に見ていただくということでもよろしいか。

事務局： 本日いただいたご意見を計画案へ反映し、委員長と副委員長にご覧いただく。委員長、副委員長のご了解をいただいた段階で、他の委員にも計画案をお送りする。

3 協議事項（3）について

質問・意見なし